

プロティノスにおける永遠と時間

岡野 利津子

序

周知の通り、プロティノスは『永遠と時間』 *Περὶ αἰῶνος καὶ χρόνου* と題されている第3 エネアス第7論文 (III 7 [45]) でこの問題を集中的に論じている。そこでは時間を永遠の似姿だとするプラトン『ティマイオス』37d5の考えに従った上で (III 7 [45] 1, 19; 11, 46-47; cf. I 5 [36] 7, 15)、永遠をヌースの生命として、また時間を魂の生命として説明している。プロティノスの場合、一者からヌースが生じ、ヌースから魂が生じるという発出論の中でヌースや魂の生命も基礎付けられており、これがプロティノスの時間論の特徴となっていると言える¹。そこで、本提題においては、III 7 [45]の記述を中心に、プロティノスのいわば発出論的「永遠—時間」論とも言えるものについて考察できればと思う。

I. 永遠について

1. プロティノスによる永遠の定義

(1) 知性界における存在の全体性という観点からの定義

プロティノスによれば、永遠とは「常に同一性の内に留まっていて、すべてを現在しているものとしてもっている生命」(III 7 [45] 3, 16-17) である。ヌースの生命において、すべてが現にあるということは、「あった」ということも「あるだろう」ということもなく「ただ、ある」ということである (*ibid.* 3, 34; cf. プラトン『ティマイオス』37e6-38a1)。永遠とは「有るものにかかわる、有るということにおける、全体が一緒にあって、充満した、何れの方向にも延長をもたない生命」(*ibid.* 3, 36-38) である。

この、すべてが現にあるということは、「真に全体である」(*ibid.* 4, 13) ことを意味し (cf. *ibid.* 5, 3-4)、そこには、付加も欠乏も生じない。こうして、「すべてを現在しているものとしてもっている」ものは、「完全無欠」で「全体的」で、「欠けたところがなく」、「何も付加されない」ものであり (*ibid.* 4, 39)、知性界の存在のそうした状態と本性が永遠だとされる (*ibid.* 4, 42-43)。

更に、真の全体で、決して欠乏が生じることがないということは、自己のいかなる部分も消耗しないということ (*ibid.* 5, 25, 26-27)、絶えないということ (*ibid.* 5, 24)、つまり「無限」(*ibid.* 5, 24; III 8 [30] 8, 46-48) ということを含意している。そこで、全体的であることによって、「永遠とは既に無限の生命である」(III 7 [45] 5, 25-26)。

また、「真にある」(*ibid.* 6, 12-13; 34) ということは、あらぬようにもならなければ、別様にも

ならないということ、つまり、同じように (*ibid.* 6, 14) あり、異なることがない (*ibid.*) ということである。そこで、人はそれを分けたり、展開したり、前進させたり、伸ばしたり (*ibid.* 6, 15-16)、それにおいて前後を捉えたりすることはできない (*ibid.* 6, 16-17)。「それにはより先もより後もない」μῆτε πρότερον μῆτε ὕστερον περὶ αὐτό (*ibid.* 6, 18)。それは「不可分」(*ibid.* 6, 49; 50) なものであり、「非延長の力」ἀδιάστατος δύναμις (*ibid.* 6, 35) だと言われる。

(2) 一者との関係における定義

プラトンの「一の内に留まっている永遠」μένοντος αἰῶνος ἐν ἐνί (『ティマイオス』37d6) という表現における「一」を、プロティノスはプラトンが意味しているような自己自身の一体性というだけでなく、一者を意味するものとして解釈している。つまり、「一の内に留まっている」とは、プロティノスによれば、「一者を廻り」、「かのもので出て」、「かのものへと向かい」、「かものから全く踏み出さず」、「常にかのものの中に、そして、かのものの中に留まり」、「かものに従って生きる」(III 7 [45] 6, 2-4) という意味である。ヌースの始原として一者があるというプロティノスの体系においては、この点の考察が不可欠である。永遠とは「有るものの、一者を廻る同一の生命」ἡ περὶ τὸ ἐν τοῦ ὄντος ζωὴ ὡσαύτως (*ibid.* 6, 7-8) であるとされる。

それは、「それ自身のもとに留まりつつ、かのもので (一者) へと向かい、かのもので内にある生命の活動」(*ibid.* 6, 10-11) とも言われる。ヌースの生命が、それ自身のもとに留まりながら、一者の内にあるとはいかなることを意味しているのか。これは、ヌースが自己自身を直知するものでありながら、一者を見ているものでもあるというのがいかなる意味かというのとほぼ同じ問題だと言ってよいだろう。

2. <未完のヌース>の教説

ヌースと一者との関係は、いわゆる<未完のヌース>の教説で詳細に論じられているが、先に登場した「一者から出て」、「一者へと向かう」という表現も、<未完のヌース>の一者からの発出と、その一者への「振り返り」ἐπιστροφήに言及したものとみることができる。<未完のヌース>は一者から生じて (V 2 [11] 1, 7-11)、一者を振り返って見るが、その際、一者を多様化して捉える (V 3 [49] 11, 2-8; VI 7 [38] 15, 13-16)。「まだ見ぬ視力」(V 3 [49] 11, 5) としての<未完のヌース>は、一者に向かって見ると、「それ自身の内でそれを多とすることによって、別のものを得て出てきた」(*ibid.* 7-8) と言われている。ヌース自身が増やした別のものとは、一者の「印象」τύπος (*ibid.* 8) ²である。これが知性界の諸形相であり、こうしてヌースは諸形相を対象とした直知活動に至る。

但し、ヌースには本来、後先の区別がない (cf. V 9 [5] 5, 2-4)。ヌース生成の場面でしばしば語られる<理論的順序>は、本来は直知的な領域にはない。「我々が分析することにより、(知性界の諸要素の) あるものが他のものより先に考えられるのである」(V 9 [5] 8, 19-20; cf. *Ibid.* 9, 1-3; II 4 [12] 4, 16-20; *Ibid.* 5, 4-7) とプロティノス自身が述べているように、たとえ知性界の諸存在について述べられた順序であっても、本来<理論的順序>とは、我々の推論的思惟に固有の順序であり、推論的思惟が作り出すものでしかない。つまり、原因と結果とを前後関係において捉える推論的思惟の制約の中で説明しようとする、まず<未完のヌース>が一者から生じて、次にそれ

が一者を振り返って見るという順序になるが、そうした思惟の制約を離れて言うなら、ヌースは「常に」「既に」「全体」である。ヌースは「可能的なものでも、無知からヌースへと至ったものでもなく、現実的なものであり、常にヌースであるもの」(V 9 [5] 5, 2-4) である。その意味では、ヌースは常に「見ている視力」だと言わねばならない (III 8 [30] 11, 2; cf. *Ibid.* 23-24)。

すると、ヌースそのもののあり方の理解としては、まず<未完のヌース>としての何かが一者から生じ、その後でそれが一者に向かって帰って行くと考えるべきではなく、ヌースにおいてはむしろ発出即振り返りだとみなさなくてはならないことになる³。実際のところ、<未完のヌース>の一者への振り返りは、一者への帰一ではなく、ヌースの限定、完成である。ヌースの永遠性、不変性が問題となっている III 7 [45] 6 でも、「一者から出て」「一者へと向かう」という表現は、それぞれを切り離して順次に考えるべきではなく、「一者から出て、一者へと向かう」あり方が、「一者を廻る」ヌースのあり方なのだと思えるべきであろう。

<未完のヌース>の教説によれば、ヌースの活動とは、一者から生じ、一者を振り返って見る「視力」が、一者の多様な「印象」としての諸形相を捉える活動であるが、これらの諸形相を直知する活動は、ヌースの自己直知だとされるのであるから、ヌースは一者を見ているにもかかわらず自己を直知していることになる。しかし、ここでヌースの自己直知の理解が困難になるのは、<未完のヌース>が一者から発した後で、それが自己の外に一者を振り返って見るかのように解釈するからなのである。ヌースにおける自己が自己を対象とするという自己反省的な性格は、「一者から生じて」「一者を振り返る」という点に現れていると言える⁴。プロティノスの体系において、ヌースが一者から発し、一者に依存するものであるにもかかわらず、その本質が自己直知であるということを理解するには、ヌースの活動を、一者から発したものが一者へと振り返る、一者を廻る、ある種の再帰的な活動とみなすしかないと思われる。

以上でまとめたように、III 7 [45] 3-6 では、知性界の全体性と、一者との関係から永遠が考察されているが、一者との関係において与えられた永遠の定義としての「有るものの、一者を廻る同一の生命」という表現は、「一者から出て」「一者に向かう」、つまり、一者から発して一者を振り返って見る、その活動が常に同一であることを意味していると言える。ヌースは多様な形相としての一者の印象を一挙にすべて見ているために、常に不変で全体的であり、非延長的な生命なのだと思える。

II. 時間について

1. プロティノスによる時間の定義

プロティノスによれば、永遠が、「静止した、同一で、不変の、既に無限である生命」(III 7 [45] 11, 45-46) であるのに対し、ちょうどこの世界がかの世界の似姿であるように、時間が永遠の似姿でなければならないとすれば (*ibid.* 46-48)、「直知的な動きの代わりに、魂のある部分(感性界に向かう部分)の動きがあり、同一性と不変性と留まるものとの代わりに、同じものの内に留まらずに次々と異なる活動をするものがあり、非延長的 *ἀδιάστατον* で一であるものの代わりに、連続的な *τὸ ἐν συνεχείᾳ ἐν* があり、既に無限で全体であるものの代わりに、限りなく常に次のものへと進むものがあり、密集している全体の代わりに、部分的に存在しながら常に(将来において)

全体であろうとしているものがあると言わなければならない」(ibid. 50-56)。「魂は、次から次へと異なる自分の活動を順次に提供することによって、活動と一緒に<順次に>τὸ ἐφεξῆς ということを生み出した」(ibid. 35-37)と言われている。

魂は知性界を見ながら、結果的にヌースの直知とは違った逐次的な仕方では諸形相を展開していることになる。これは、ちょうどヌースが一者を見ながら、一者においては非直知的であったものを、直知という別の仕方では展開しているのとパラレルである。そして、ちょうどヌースが一者を見て、一者において未分であったものを多様な諸形相へと分化させたように、魂は知性界の内容を更に分化させる。つまり、ヌースにおける多様性はすべてが一挙に直知されているという点で全体が一つになっているのに対し、魂によって知性界における全体が逐次的に繰り広げられてゆく。魂における知性は推論的、逐次的思惟 λογισμός, δίανοια だと言われている。

2. 時間を生み出すのは、魂の外的活動においてであることについて

プロティノスによれば、こうして時間を生み出す魂の活動とは、「自分に向かうものでも、自分の内にあるものでもなく、創造し、生み出す活動である」(III 7 [45] 12, 7-8)。魂は、「感性界を作る際に、……永遠の代わりに時間を作った」(ibid. 11, 27-30)と述べられている。つまり、時間を生み出す魂の活動は、魂の内的活動ではなく、感性界を作り出すという外的活動であり、時間がその生命だと言われる魂とは、外的活動を発して感性界を作り出す魂、即ち宇宙靈魂だということになる (IV 4 [28] 15, 12-13; cf. III 7 [45] 12, 23)。

ここで言う内的活動と外的活動とは、いわゆる<二つの活動の教説>において述べられているものである。ちょうど、火に火としてあらしめる熱と、そこから外に発して他のものを暖める熱とがあるように、すべてのものにその実体そのものをあらしめる活動 ἐνέργεια (実体的、内的活動)と、その実体から派生的に外に発する活動 (派生的、外的活動)とがあるということがプロティノスによって指摘されている (V 4 [7] 2, 27-33; cf. IV 5 [29] 7, 13-18)。魂の内的活動はヌースを見るという活動であるが、更に魂からその外的活動として、感性界を支配し秩序付けるという活動が生じる。魂はこの活動を持つことによってヌースと異なる。

そして、魂は自分が生み出した「感性界の全体が、時間の中にあるように作った」(III 7 [45] 11, 31-32)。なぜなら、この感性界の場所は魂であり (cf. プラトン『ティマイオス』34b4; 36d8-e5)、感性界は魂の中で、従ってまた魂の時間の中で動くからである (III 7 [45] 11, 33-35)⁵。

3. 魂は時間の中にないことについて

魂自体は時間の中になく (III 7 [45] 13, 41-44)、逆に、感性界が魂の中にある (ibid. 11, 34; V 5 [32] 9, 29-31)と言われるように、「時間が魂の中にある」(III 7 [45] 11, 62)と言われている。プロティノスは、「魂がこの宇宙 (感性界) と一緒に時間を生み出した」のだから、「(時間は) この宇宙と同時に生れた」と考えている (ibid. 12, 22-23)。そこで、魂の外的活動 (感性界を作り出すという活動) も時間の中で行われるものではなく、むしろこの活動の結果生み出されるものが時間であり、またその中にある感性界だということになる。プロティノスは魂の活動が時間を「作り出す」(ibid. 11, 30)と言っているわけだが、時間を作る活動は時間の中では行われ得ない。時間は時間の流れの中で生じるものではない。IV 4 [28]では、宇宙靈魂は「時間を生み出しこそすれ、

時間の中にはない」(15, 12-13)と述べられている⁶。そして更に IV 4 [28]の記述によれば、宇宙靈魂が宇宙を支配するのは「一つの同じ働きに留まりながら」(10, 25-26; cf. *ibid.* 11, 16-17)である。「<これの後にはあれを>というのは、すべてが同時にあることのできない事物においてあること」(*ibid.* 16, 19-20)で、「作られるものたちにおいては<より先のもの>と<過去のもの>とがあるが、宇宙靈魂においては<過去のもの>は何もなく、すべてのロゴスが同時に存在している」(*ibid.* 16, 4-6)とされている。

また、魂が理性的 *λογική* だと言っても、身体の内にはない魂が、身体に宿っている我々人間の魂のように、時間の中で推論を行うわけではないということにも注意しなくてはならない⁷。魂が推論 *λογισμός* を働かせるのは、「困惑したり、気掛かりな事に追われたり、とりわけ、弱っている時」(IV 3 [27] 18, 3-4)であり、魂は感性界にやってくる以前や感性界から去った後には推論を働かせないとされている (*ibid.* 1-2; *ibid.* 7)。知性界の魂は推論的思惟の基盤のようなもので、我々の推論に先立って、推論を可能にしているという意味で、理性的だということになる (cf. *ibid.* 8-10)。

知性界にいる魂や星々の魂は言語を用いないとも言われている (*ibid.* 13-15)。言語を用いない魂の理性と、我々が言語で考える時の思考との違いは、時間の内にはない魂の理性と、我々が感性界で時間の中で行う (つまり、<時間的順序>を伴って行われる) 推論との違いだと言えるだろう。

III 7 [45]では、宇宙靈魂は「<その先>と<より後>と<同じではなく、次々に異なるもの>へと動きながら」(11, 17-19) 時間を作り出したとされているが、時間を作り出す活動自体は時間の流れの中にはないので、魂の活動として述べられる<より先>や<より後> (*ibid.* 13, 33; 37-38) といった順序は、以上の点を考慮するならば、<時間的順序>と区別される、いわゆる<理論的順序>だと考えざるを得ない。<時間的順序>は、魂のそうした活動の結果、感性界と共に、感性界がその中にあるべく生み出される。

結論

永遠はヌースの生命として、そして時間は魂の生命として述べられるが、ここで注意しなくてはならないのは、前者がヌースの内的活動 (実体を成す活動) であるのに対し、後者が魂の外的活動 (派生的活動) であるという点である。永遠はヌースの内的活動であるため、この活動によって生ずる知性界の諸形相も永遠の内に *ἐν αἰῶνι* あり (cf. IV 4 [28] 1, 12-13; V 1 [10] 4, 17; VI 6 [34] 18, 36)、「かしこの世界 (知性界) 全体が永遠的 *αἰώνιον* である」(III 7 [45] 3, 1-2; cf. *ibid.* 2, 19)。これに対して、魂が時間を生み出すのは、感性界を作り出すという外的活動においてである。従って、魂そのものは時間の内になく、感性界が時間の内にあることになる (cf. *ibid.* 11, 31-33)。このようにして、永遠はヌースの生命に、そして時間は魂の生命に関係付けて述べられるが、「一方 (永遠) は永久の本性的もとにあり、他方時間は生成するもの、つまりこの世界のもとにある」(*ibid.* 1, 2-3) ということになる。

凡例

使用したプロティノスのテキストは、Henry, P., and Schwyzer, H.-R., *Plotini opera*. 3 tomi. Oxford: Clarendon Press (*editio minor*), 1964-1982 である。引用文中の () 内は引用者による補足である。

文献

W. Beierwaltes, *Plotin, Über Ewigkeit und Zeit (Enneade III 7); Übersetzt, eingeleitet und kommentiert von Werner Beierwaltes*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1967.

Plotin, *Traité 45-50, Présentés, traduits et annotés par Matthieu Guyot, Thomas Vidart, Richard Dufour, Francesco Fronterotta et Jean-Marie Flamand, sous la direction de L. Brisson et J.-F. Pradeau*, Paris: Flammarion, 2009.

小浜善信「永遠と時間—プロティノスからトマスまで—」、新プラトン主義協会編、水地宗明監修『ネオプラトニカ—新プラトン主義の影響史—』昭和堂、1998年、119-169頁。

—「西洋古代における時間論の四類型—アリストテレス、ストア派、プロティノス、アウグスティヌス—」、渡邊二郎監修、哲学史研究会編『西洋哲学史の再構築に向けて』昭和堂、2000年、66-103頁。

¹ 「プロティノスの時間論を理解するためにはその体系の構造を考慮しなければならない」(小浜善信「西洋古代における時間論の四類型—アリストテレス、ストア派、プロティノス、アウグスティヌス—」、渡邊二郎監修、哲学史研究会編『西洋哲学史の再構築に向けて』昭和堂、2000年、73頁)。及び、小浜善信「永遠と時間—プロティノスからトマスまで—」、新プラトン主義協会編、水地宗明監修『ネオプラトニカ—新プラトン主義の影響史—』昭和堂、1998年、121頁、W. Beierwaltes, *Plotin, Über Ewigkeit und Zeit (Enneade III 7); Übersetzt, eingeleitet und kommentiert von Werner Beierwaltes*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1967, S. 9-10 を参照。

² VI 7 [38] 16, 34 では、<未完のヌース>は一者からの諸形相で満たされることによって、「いわば刻印される οἶον ἐτυπούτο」と述べられている。一者の「印象」とは諸形相である。

³ W. Beierwaltes, *op. cit.*, S. 16.

⁴ この時、ヌースを発するの、ヌースによって振り返って見られるの、実体的、内的活動に留まる一者そのものではなく、一者の派生的、外的活動であり、これがヌースの実体となる。拙著『プロティノスの認識論—なるものからの分化・展開—』知泉書館、2008年、111-114頁参照。

⁵ <二つの活動の教説>においては、あるヒュポスタシスの実体を成す活動と、そのヒュポスタシスから出て別の下位のヒュポスタシスを作り出す活動とが、それぞれ<内的活動>と<外的活動>というように研究者たちによって呼ばれている。<二つの活動の教説>においては、下位のヒュポスタシスは上位のヒュポスタシスの<外>にあることになる。その一方で、下位のヒュポスタシスが上位のヒュポスタシスの中(内)にある(cf. V 5 [32] 9, 31; VI 7 [38] 35, 41)と言われる場合がある。両者の<内(中)>の意味は異なり、前者の場合はそのヒュポスタシスに留まるという意味であるが、後者の場合は「包まれる」(cf. V 5 [32] 9, 9-10)という意味である。本稿では詳しく論じる余地がないが、たとえば一者と他のものとの関係について言うなら、一者から生じたすべてのものは、ヒュポスタシスとしての一者と異なるという観点から、その<外>のものとして捉えられる。とりわけ、太陽や泉のような物質的な比喩からは、すべての存在が一者の<外>にあるものとイメージされる。しかし、すべては一者から生じ、本来は一者の中(内)に未分の状態で含まれていたものの展開であり、いずれも一者の内容を超え出るものではないのだから、すべては一者の無限の内容が、それぞれ限られた、より狭い仕方限定されものだと考えられる。その意味では、一者より大きなものはなく、すべてが

一者の中（内）に包まれると言われるのも尤もである。

「時間は魂の中（内）にある」（III 7 [45] 11, 62）と主張するプロティノスの時間論では、時間というものも魂から独立して存在するものではなく、魂の内容から出てくるものだと理解される。

⁶「我々の魂でさえ、時間の中にはなく、時間の中にあるのは我々のある種の状態や作品である」（IV 4 [28] 15, 16-17）。

⁷我々の魂の知性 νοήσεις や理性の働き λόγοι は、時間の中にある（IV 4 [28] 17, 1-2）。